

河辺いきものの森の植物 その2

前回の95号では、荒れていた森に手を入れてもとの森の姿にもどしたところ、もう絶滅したのではないかと思われていた植物のいくつかが復活した様子を紹介したが、今回は四季折々にこの森の景色にアクセントを与えてくれる花をいくつか紹介したい。

スマレのなかま

冬枯れの木々の梢がほんのりと赤みを帯びてくる春三月、ややひらけた林床の落ち葉のなかに花を咲かせるすみれがある。この森に五種類あるすみれのなかで最も早く咲くアオイスミレである。花は青に近いうす紫色、他のすみれが咲き始める頃にはもう花は終わっている。そしてその名の由来となった葵の形の丸い葉をぐんぐんとひろげていく。



アオイスミレ

三月の終わり頃から咲き始めるタチツボスマレは最も個体数の多いすみれで、林床にうす紫色の絨毯をひいたように咲き乱れる。四月の中頃になると、タチツボスマレによく似たニオイタチツボスマレが咲きはじめる。しゃがみ込むとかすかに芳香がするのでこの名がある。

この森では、他にやや湿ったところに咲く白い花のニョイスミレと、日当たりのよい草地に濃い紫色の花をつけるスマレがある。



タチツボスマレ

シュンラン

林床が明るくなって元気を取り戻したシュンランは、まだ葉を開ききらないコナラやアベマキの林に差し込む春の陽を受けて一斉に咲く。ある時は乱獲の憂き目にあい、その後は勢いを増してきた常緑樹に陽光を奪われて細々と生きてきたものが、見違えるように元気になり、株も大きくなって、いまは立派にこの森の「春の妖精」にカムバックしている。



シュンラン

シャガ

五月の森はシャガの大群落飾り立てる。竹林やその周りのややうす暗い林床は、淡青紫色のシャガの花で足の踏み場もないくらいになる。葉は光沢のある濃い緑色、高さ50センチメートルほどの茎の上に、直径5～6cmもの花を咲かせる様子はなかなか圧巻である。このシャガ、日本国中あまりにも分布が広いので、昔から日本にあった花だと思いがちだが、もともとは中国原産で、園芸種として我が国へ入ってきたものが野生化したものだろうといわれている。



シャガ

クサイチゴ

この森でいちごと名のつく植物は、ヘビイチゴ、ヤブヘビイチゴ、オヘビイチゴ、フユイチゴ、ナワシロイチゴ、ニガイチゴ、コジキイチゴ、クサイチゴの8種類があげられる。黄色い花が咲いて赤い実のなるヘビイチゴ類は、その名前のせいか誰も食べようとしない。決して毒ではないのだが、食べてみると果肉がスポンジ状でうまくない。森へやってくる子どもたちに人気のあるのは、クサイチゴとナワシロイチゴとフユイチゴだが、その中で一番人気がこのクサイチゴである。四月の終わり頃から、純白五弁で直径4cmほどの大きな花をつけ、その後に直径1.5cmばかりの大きなイチゴをならせる。甘くてよい匂いがするので、子どもだけでなく大人にも人気がある。名はクサイチゴだが、冬にも茎の枯れない落葉低木である。



クサイチゴ花

フユイチゴはその名の通り冬にみのるいちごで、冬休みに森へやってくる子どもたちが、群生している林床に分け入って、時ならぬイチゴ摘みをする。



クサイチゴ実

エビネ

エビネはシュンラン以上に受難の時期が長く、乱獲の度合いもひどかった。そして今も完全に危機が去ったとはいえない状態が続いている。古老の話によると、昔はこの森のあちこちで普通に見られたというエビネも、1997年の調査では一株も見つかっていない。しかし保全作業に入ってから、森のあちこちで少しずつ見つかかり、現在はだいぶ復活して、5月の頃ともなると可憐な花が見られるようになった。

この森の保全作業をはじめたばかりの頃、絶滅を防いで個体数を増やそうと、僅かに残っていた数株を県の農業技術振興センターに依頼してクローンで増殖させたものを、平成15年に100株ほど森のあちこちに再移植したが、これはまだ花をつけるまでには至っていない。



エビネ

エビラフジ

本来は山地の植物、愛知川上流の谷では比較的多く見られるが平地では珍しい。この森ではただ一ヶ所、シナノキの近くに小さな群落があり毎年六月になると50cmばかりの茎の上に濃い紅紫色の花をほんのちょっぴりつける。この森の作業に入った当初に見つかかり、それ以来群落は広がることも狭まることもなく毎年同じように花を咲かせている。

群落は道から一畝ほど入った草むらのなかにあるが、小さくて目立たない花なので、ほとんどの人は気がつかない。しかしじっくり



エビラフジ

見つめると、美しい蝶形花の集まりは、えもいわれぬ風情がある。花のあとには3cmばかりの細い莢に入った種子（豆）ができる。

えびらとは、武士が戦いのおりに矢を入れて持ち歩いた容器のことで、花の形をそのえびらに見立てたものである。

今回は、この森に咲く草本の花を主に紹介したが、紙面の都合上ほんの一部しか取り上げることができなかった。なお樹木の花については次の号で紹介したい。